

企画展  
**縄文有用植物展**  
 クリ植え マメ播き ウルシを掻いた!?  
 会期：平成30年2月3日(土)～6月17日(日) 須田 大樹

縄文時代と聞いたとき、どのようなイメージをお持ちでしょうか。「原始的な人々が獲物を追って原野をさまよう…農耕が始まる前の遅れた時代」、そんなイメージはないでしょうか。

1万年以上にわたる長い間、自然と人がともにくらした縄文時代。近年、植物関連の遺物が残りやすい低湿地遺跡の発掘が進んだことで、当時の人々が意外と積極的に森林や草原の管理を行い、役に立つ植物を利用して生活していたことが明らかになってきました。

本企画展では、自然史標本と埼玉を代表する植物関連の考古資料を用いて、現在の自然環境や植物利用にもつながる知られざる縄文有用植物の世界について、ご紹介しています。お借りしている100点に及ぶ考古資料の多くは、普段は公開されていない貴重なものばかりです。



展示風景



## 第1章 生きることは食べること

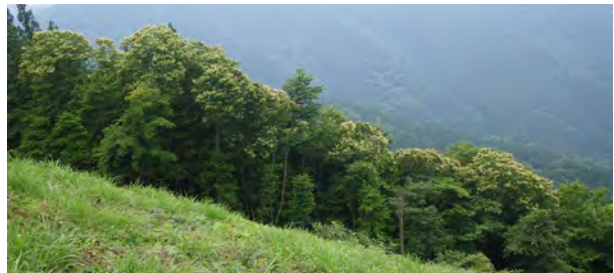
第1章では私たちに身近なテーマである「食」を切り口に、縄文時代の人々がどのような植物を利用してこらしたのか、ご紹介しています。

### (1) みんな大好き！クリ&どんぐり

食糧を得にくい冬も含め、安定して縄文の人々の暮らしを支えたのが、保存も可能なクリ・どんぐり・オニグルミといった「木の実」でした。

東日本では、特にクリが多用されました。集落のまわりにクリ林が仕立てられ、大粒のクリを人が選んで長年利用していった結果、次第に実が大型化していったことがわかっています。

どんぐりも食べられていましたが、アク抜きが容易なイチイガシを多用した西日本と比べると、アクの強いナラ類が中心となる東日本ではそれほど積極的に利用されなかったようです。



#### クリの多い暖温帯上部(中間温帯)の林(東秩父村)

落葉広葉樹林の広がりとともに、多くの木の実が得られるようになった。最も温暖な時期でも、埼玉付近ではシイ類・カシ類などの常緑広葉樹林(照葉樹林)はそれほど広がらなかった。

### (2) クリ・クルミからトチノキへ

オニグルミもアク抜きの必要がなく、縄文時代を通じてよく利用されました。

#### クルミ形土製品 デーノタメ遺跡 / 北本市教育委員会蔵

クルミを模した土製品。クルミ捨て場から出土しており、当時の人々のクルミへの思いをうかがうことができる。



縄文時代終盤に利用が増加したのが、それまであまり利用されていなかったトチノキです。トチノキは実が大きい一方、食べるには高度なアク抜き技術が必要です。環境の変化に対応し、水辺に大規模な施設を作って組織的に利用することで、安定した食糧確保に努めたと考えられています。

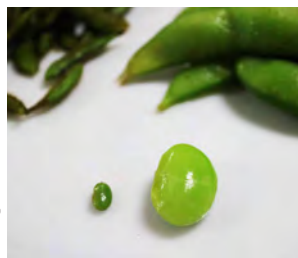


トチノキの実 加工場跡 復元画  
赤山陣屋跡遺跡 / 川口市教育委員会提供

### (3) マメに育てて

縄文時代の中ごろから、東日本では野生のツルマメ（ダイズの原種）やヤブツルアズキ（アズキの原種）が利用されました。やはり何らかの形で栽培が行われ、時代の経過とともにマメのサイズが大きくなっていったことがわかっています。

栄養豊富で貯蔵性の高いマメ類、木の実と並んで重要な食糧だったことでしょう。



野生のツルマメ(左)  
と栽培ダイズ(右)

## 第2章 縄文人は木づかい名人

第2章では、現代の木材に関する知識や利用と遜色ない、縄文の人々の木材利用の知恵についてご紹介しています。

### (1) クリって便利！

実だけでなく木材の面からも、東日本の縄文時代の人々はクリを多用しました。水辺の土木工事、家の構造材、丸木舟など、耐久性の必要な重要な部分に水に強いクリが使われました。

### (2) 適材適所

しゃくしや細工を施した容器にはイヌガヤ、朽にはイヌガヤやニシキギ属・ムラサキシキブ属、土掘り具のような木製品や石斧の柄などにはコナラ

属、漆器の木地や大型の器にはサクラ属やトチノキといった具合に、それぞれの木材の性質をよく理解し、上手に利用していました。

## 第3章 くらしを彩る

第3章では、彩りや補強、接着などに使われたウルシの高度な利用法や、多様な編みもの、有用植物の渡来など、くらしをより豊かに、より便利にした植物利用についてご紹介しています。

### (1) 多彩なウルシの利用

ウルシの木を計画的に育て、手間をかけて樹液採取と処理を行い、顔料を遠方から入手し、高い工芸性・芸術性をもった漆製品を生み出した縄文の人々。漆の性質を活かした機能的にも優れた複合弓や籃胎漆器などもみつかっています。当時の植物利用の粋ともいえる、高度な技です。

#### 籃胎漆器 石神貝塚 / 川口市教育委員会蔵



ササなどを割いて骨組みを作り、漆を塗って仕上げた容器。

### (2) 植物を編む

これまでも編みものについては、土器の模様や底についた敷物の痕跡からもその存在をうかがい知ることができましたが、近年は各地の低湿地遺跡から編み物本体が出土し、素材や用途、技術などが明らかになりつつあります。

### (3) 大陸からやってきた植物

渡来の可能性のあるウルシのほかにも、ヒョウタン、エゴマ、アサなど、多くの有用植物が早い段階で大陸から持ち込まれ、利用されていました。



関東周辺における縄文時代の植物利用の全体像が理解できるとともに、現在の自然環境や植物分布がどのように成立してきたのかや、植物の利用などに興味のある方にもお楽しみいただける展示となっています。ぜひご来場ください。

(すだ だいき・学芸員)